

課題名： 広汎性発達障害における対人相互作用障害の心理神経基盤の統合的解明

氏名： 佐藤 弥

機関名： 京都大学

1. 研究の背景

広汎性発達障害(自閉症などの発達障害の総称. Pervasive Developmental Disorder, 以下 PDD) は, 対人相互作用の障害を主症状の一つとする. 特に表情コミュニケーションの問題は顕著である. PDD者は比較的多く, 医療・教育現場において独特の困難をもたらすため, その本質的な理解が社会から強く要請されている. しかし現状では, PDDの障害の心理・神経基盤は不明である.

2. 研究の目標

PDDにおける対人相互作用の障害の心理・神経基盤を解明することを目標とする. この目標の実現のため, PDD者における動的表情の処理について, 心理学・神経科学研究を組み合わせ徹底的に追究する.

3. 研究の特色

動的表情を刺激とする研究手法は, 表情写真を用いたほとんどの先行研究に比べ, 新規性が高く, 現実の問題の検討のために妥当であり, 研究者が世界的にリードしているオリジナルなものである. 心理実験, 臨床検査, fMRI, 解剖学的MRI, MEGという複数方法論の有機的統合は世界に類がなく, 全く新しい知見を生み出す可能性が高い.

4. 将来的に期待される効果や応用分野

PDDの障害の心理・神経基盤が同定されることで, 医療において効果的な早期診断や介入技法を準備でき, 教育において特性に合った教育方法を提供して本人および周囲の教育効率を向上させられると期待される. PDDの障害の理解から, 定型発達者におけるコミュニケーションの向上についても示唆が得られる.

広汎性発達障害における対人相互作用障害の心理神経基盤の統合的説明

背景

広汎性発達障害(PDD)

対人相互作用の障害を主症状とする発達障害(自閉症など)の総称。表情コミュニケーションに特に問題。臨床・教育現場で独特の困難。

しかし心的メカニズムは不明。実証知見(静的表情を使用)は不一致。

我々の先行研究(PDD者・心理学)

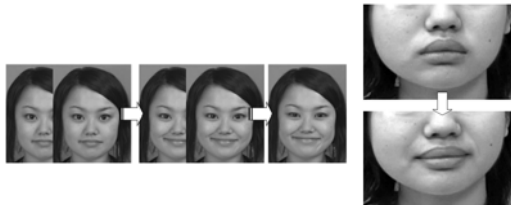
動的表情を使用。
静止画刺激で見出されない知見を発見。



Uono, Sato, & Toichi (2009)

我々の先行研究(定型発達者・心理学)

動的表情の処理を検討。
知覚・情動反応・表情模倣における独特のパターンを発見。



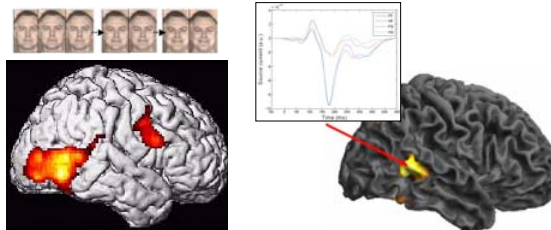
Sato & Yoshikawa (2007)

目的

PDD者における動的表情処理の問題を、心理学的・神経科学的に徹底的に追究。

我々の先行研究(定型発達者・神経科学)

動的表情処理の神経基盤を検討。
fMRIで空間、MEGで時間の構造を同定。



Sato et al. (2004)

Sato et al. (in prep)

計画

先行の実験パラダイムを活用。
動的表情の重要な心理過程を検討。

年度(平成)	中心テーマ
22	受動的注視
23	知覚
24	表情模倣
25	情動反応